

令和7年度版

市民が綴った戦争体験記



発行：大東市 令和8年3月

市民が綴った戦争体験記(令和7年度版)

大東市では、令和7年度に戦後80周年の節目の年を記念して、戦争にまつわる体験記の募集をおこないました。

この体験を作成するにあたり、空襲体験、学童疎開、被爆体験など、戦争を直接体験されたご本人からの証言に加えて、父母や祖父母など身近な方から聞き伝えられた体験も対象としました。

市民からお寄せいただいた貴重な体験記は、すべて市のホームページに掲載させていただいています。また、今回の取り組みにあたり、大東市原爆被害者の会から、同会が以前に作成されていた被爆体験記の冊子をご寄贈いただき、掲載にご協力をいただきました。

戦後80年が経過し、戦争を直接経験された方々がご高齢となる中で、当時の記憶をどのように次の世代へ伝えていくかは、大きな課題です。

本市ではこれまでも、市民が綴った戦争体験の冊子化や、語り部による被爆体験動画の配信などを通じ、戦争の悲惨さや平和の尊さを市民の皆さまに伝える取組を進めてきました。

これらの取組は、戦争を知らない世代にとっても戦争の悲惨さを学び、平和の尊さを考える貴重な機会です。

この体験記に綴られた声が、読者の皆さま一人ひとりの心に深く響き、平和という灯火が、人権尊重の精神と共に未来へと確実に受け継がれていくことを願ってやみません。

※ご投稿いただいた文章は、原文を尊重し、そのまま記載しています。

※歴史的事実関係等、執筆者の記憶を尊重し、そのまま記載しています。

〈目次〉

声を知らない父へ ～戦争が奪ったもの、そして今～……………	1
〈※以下、大東市原爆被害者の会からご提供いただきました〉	
広島編 ……………	5
原爆投下の日 ……………	6
八月六日 ……………	8
今思うこと ……………	9
十五歳 被爆時の思い出 ……………	10
被爆について ……………	11
ピカドン ……………	12
私の大好きないと子 ……………	15
原爆投下した後 ……………	17
斐爆者 ……………	18
長崎編 ……………	19
被爆当時を記憶のままに ……………	20
被爆当時の状況と家族状況 ……………	26
被爆の日 ……………	27
六十五年経た薄れゆく記憶を辿り ……………	28

私の 8 月 9 日	30
大戦の追憶	31
母に聞いた話	32
被爆者	33
被爆体験(姉兄に聞く)	34
宿命=被爆者	35
長崎の記憶	38
わたしの被爆体験	39

声を知らない父へ ～戦争が奪ったもの、そして今～

片倉豊子

私(83歳)には、戦争で亡くなった父がいます。父・片倉太郎の顔は、色褪せた写真でしか知りません。その声を聞いたことは一度もなく、父と手を繋いで歩く友達の姿を、物陰に隠れて見つめていた幼い日の記憶が今も胸を締め付けます。「戦争は家族をバラバラにする」。苦労を重ねた母がいつも口にしていたその言葉は、80年以上の時を経た今、私の心に深く刻まれています。

父は昭和19年、30歳ほどの若さで中国の衝陽(しょうよう)へ送られました。軍では几帳面な性格を買われ、経理や記録の仕事を担っていたと聞いています。そして終戦後の昭和20年10月、父は異国の病院で病に倒れました。戦争は終わっていたのに、父は故郷の土を再び踏むことなく、帰らぬ人となったのです。

戦後しばらく、私たち家族は父が中国で亡くなったという事実しか知ることができませんでした。どこで、どのように最期の時を迎えたのか。その詳細を知りたい一心で、私は読売新聞の「戦争・尋ね人」のコーナーに望みを託しました。来る日も来る日も投稿を続け、3年の月日が流れたある日、一本の電話が鳴りました。それは、読売新聞から、父の上官だった方から連絡があったとのことでした。

その方は、父と同じ大阪出身で、戦地では数少ない関西弁を話す仲間として、父を弟のように可愛がってくれたそうです。「生きて一緒に帰ろうや」。そう励まし合った日々、そして「薬がもう一服あれば助かったのに」という、あまりにも無念な最期の様子を、言葉を詰まらせながら教えてくれました。この連絡によって、私たちは初めて父の死の具体的な状況を知ることができたのです。

その上官は、戦争がもたらす悲劇についても語ってくれました。父の戦友が亡くなった際、その小指と手帳を遺品として故郷の家族へ送ったものの、その方の家族から「死んで帰ってこいと言ったはずだ」と受け取りを拒否され、叶わなかったというのです。戦争は、兵士の命だけでなく、残された家族の心さえも無慈悲に引き裂いてしまいます。

私が3歳の頃、戦火を逃れるため、家族は大阪市東成区から四国へ疎開しました。

母は乳飲み子だった弟を抱え、慣れない農業に身を粉にして働きました。イノシシを村人と協力して捕らえ、食糧にしていたという話も聞いています。夫を戦争に奪われ、たった一人で私たちを育て上げた母の苦労は、計り知れません。母が常々「戦争は死んでも忘れられない」と語っていた意味を、年を重ねるごとに重く受け止めています。

戦後、私は父の足跡を辿るため、遺族会の一員として中国の地を訪れました。上官から聞いた父の行軍ルートを巡り、その地で追悼式を挙げ、父への手紙を読んでもらいました。父が見たであろう景色を前に、声も知らない父の存在を確かに感じた瞬間でした。

時折、私は孫やひ孫に戦争の話をしてあげます。しかし、平和な時代に生まれた彼らにとって、それは遠い昔の物語のようで、真剣に耳を傾けてくれることは稀です。「自分には関係ない」という空気が、そこにはあります。「おじいちゃんは可哀そうだったね」と涙ぐんでくれたのは、姪っ子くらいでした。この記憶と悲しみを、どうすれば次の世代に伝えていけるのか。焦りと無力感に苛まれることもあります。

戦争は、個人の夢や未来、そして家族の温かい時間、そのすべてを台無しにします。私にとって、父を奪った戦争は今も終わっていません。この悲劇を二度と繰り返さないために、戦争の記憶を語り継いでいくこと。それが、父の顔を知らない娘として生まれた私にできる、ささやかで、しかし最も大切な務めなのだと信じています。

北西美津子

この文章は、私(母から見て娘)がまとめたものです。母の戦争体験談になります。

私は現在 94 歳、1931 年 1 月生まれです。生まれも育ちも住所は変わらず赤井(戦争当時は北河内郡南郷村)です。

父は、支那事変(1937 年)の時に中国へ渡りました。中国に渡る前に父に赤紙が届きました。赤井では 2 名に届いていました。

戦地へ送る別れの儀式を、神社で、村人全員で行いました。徴兵検査があり、体格の良い父は甲種合格でした。他に乙種合格者もいました。支那事変当時 6 歳だったので、なぜ父が支那へ戦争に行ったのか訳が分からず、見送った記憶がありません。

何年か経って覚えていませんが、突然父が帰ってきました。帰国するまでの間は、家族総出で田んぼの仕事で大変忙しかったのを覚えています。

大変貧しい生活でしたが、農家だったので、お米だけはなんとか食べることができました。

父が帰国して今度は赤紙ではなく、高齢のため警備召集として集められました。

その後、アメリカとの大東亜戦争が始まり、父が万が一に備えて自宅前に防空壕を掘りました。B29 が飛んで来るとサイレンが鳴り、防空頭巾を被って防空壕へ入るのです。

赤井は B29 がかなり上空を飛ぶので、音もさほど小さくなく、爆弾を落とされることもありませんでした。なので焼け野原ではなかったのです。しかし、灰塚には落ちたようです。赤井には他の地域から逃げて来られた人々を受け入れてあげていた人たちもいたようです。

B29 かどうか不明ですが、放出に飛行機が落ちたと知ったので、線路伝いに見に行ったのを覚えています。

また、京橋には軍事工場があったので狙われたようで、爆弾を落とされていました。赤井は他の地域に比べ、戦争中には穏やかだったかと思います。強いて言えば、真夜中にサイレンが鳴り、慌てて防空壕に入るのが大変だったことです。

大東亜戦争中、男性は戦地へ行き、人員不足となったため、13 歳頃になると、学徒動員として働きに行きました。当時は野崎の松下無線へ日給をいただき働きに行きました。部品の一部のハンダ付けをしました。その後、その場所は拘置所になり、現在は府営住宅に変わっています。

現在も家には、父の手作りの長刀があります。すごく重くて長い物です。敵が攻めてきた時に突くためです。出番が無くて良かったと思います。

以上（この文章をまとめた娘の感想です）

広島編

被爆後六十有余年、当時十四才の記憶を辿り、拙ない文を書き留める次第です。

当日は快晴。毎朝の行事が終わり、私たち見習工は実習の工場に入り、先生から何かと作業の手順その他を教わっている折、窓硝子に赤い光線が走り、夜間空襲の折の照明弾くらいに思っていました。が、続いて爆風がおこり窓硝子を破り、工場内が朦々たる埃に包まれ、地べたに目と耳を塞ぎ、暫くして起き上るも頭に硝子の破片がささっている事に気付くも、それどころか山に向かって一目散に避難。頭の痛みもあればこそ、山で市内を眺めるに、天にも届くばかりのきのこ雲。加えてあれ程の晴天が黒ずんで見え、雨も降り、その雨がどす黒く見える状況。

かくして一夜を山ですごし、明朝寮に帰って驚き。畳の下敷きの新聞紙がすべて舞い上がっている始末。それもその筈。周辺の電柱がすべて傾いている状態。幸いにも私達の会社はさしたる被害もありませんでしたが、市内での被爆者が続々と避難してこられて、上級生達は市内に狩り出されたとみえて、我々新米は比較的軽傷の人達の看護を申し付けられる。薬品とて豊富にある訳でもなくお座なりの手当てをするのみ。重症の人達は次々と亡くなり、講堂の床に死者の体の形で残っているのを見る。それらの人を山の火葬場に二人してかつぐも、後の者は負担がきつく、さしたる物も喰べていない故、尚更なり。なかんづく、同じ年ごろの女学生で偵心隊として何れかの工場で働いていたであろう鉢巻姿で焼けただれた姿は、なんともいい様のない空しさを感じたものです。遺骨となられた方々を講堂に持ち帰り、霊安所に供え、交代で番を。遺族の方の引き取りがあればと思うも空しく過ぎ、九月の初頭に会社より解散の命令があり、帰郷の途につきました。ただ横川までは電車があれど、市内から宇品港まで徒歩、無惨な死体こそ目にしませんでした。なんともみじめな姿に泣きました。待てど船は来ず、三日目にやっと乗り故郷に帰り両親に会い、生きた心地を。

時代の若者よ 立派な国に・・・

原爆投下の日

八月六日、広島原爆投下日は私にとって忘れることが出来ない日です。その時、私は四歳五カ月でした。その日、私は母に連れられて原爆ドームの近くにある耳鼻科へ行く予定でした。午前八時前に祖父から「暑くなるので早く行くように。」と言われましたが、その日に限って母は行きたくなかったようで中止しました。何故行くのを取り止めたのかと母に聞いてみましたが、はっきりとした理由はなく、ただ胸騒ぎがしたのでしょう。その十五分後の八時十五分に原子爆弾が投下され、丁度台所に立っていた私は外でピカッと光る閃光を見ましたが、幼かった私には何が起きたのか理解出来ませんでした。私の家は爆心地から2キロの所にありました。家は倒壊し、母は妹を抱えたまま柱の下敷きになり「助けて!」と叫んだそうです。幸いに母と妹は助け出され、私は家から出て山に向かって走り、やっとの思いで林の中へ逃げました。逃げる途中、黒い雨やたくさんの焼け爛れた人達に遭遇しましたが、その時の恐ろしさは私の胸に焼き付いて残っております。家族は父だけを市内に残して母の実家の廿日市へ疎開しましたが、祖父母、両親、兄弟妹四人の私たち家族全員が生き延びることが出来たのは奇跡と言うしかありません。原爆投下後、焼け野原になった広島にはもう草木が永久に生えないだろうと言われましたが、六十五年経過した現在、中国地方で一番の山と川と海に囲まれた美しい平和都市に発展しました。あの時、耳鼻科に出かけていれば、今の私は存在していません。二十一世紀は世界中に「ノーモア・ヒロシマ」を実現し、核のない平和な世界の確立を強く願っています。

原爆投下後 終戦 兵役解除

被爆時の場所 広島市白島北町
旧西部第七部隊兵舎二階(木造)

遮蔽の有無 光線を見た時に遮蔽物に身体を隠す

負傷の有無 家屋兵舎は崩壊したが負傷なし

被爆直後 火災はなく崩壊した木材で裏の演習場にて
応急の小屋を立て仮住居として過ごす

兵役解除 終戦後九月三十日迄雑用
負傷者の援護

治療の有無 病院にて
貧血、熱傷、下痢、外傷、めまい、疲労感、筋痛、
衰弱、ケロイドなし

停年退職 昭和五十六年三月三十一日 五十八才 年金生活
白内障・緑内障 入退院四回(昭和六十一年から現在も年三回通院)
胃癌(平成四年)三分の二を切除
高血圧で治療中

八月六日

昭和二十年四月一日

国鉄広島機関に学徒動員として務める。
西蟹屋町の鉄道寮に入る。

昭和二十年八月六日

休日にて竹原市忠海町の実家に帰る。

八月七日

呉線竹原市忠海町駅より広島方面に帰るも海田駅までしか列車は動かず、広島方面に行くトラックにて入市する。
一面焼け野原となり、以前の面影はなく、唯々啞然となるのみでした。

まず最初に寮に行くも、家は倒れ私物は何一つ取り出す事が不可能でした。
次に機関区に行き上司と逢い、指示に従って駅前にある高さ五メートル位、直径五メートル位の円筒形のコンクリートの建物を利用されている、三十人位の負傷者の看病を八月七日午後五時から八月八日午前八時まで、友人三名と看るよう指示を受けました。

八月八日夜五時頃広島を立ち去り、竹原市忠海町の実家に帰る。

光線は八月六日忠海の実家にて見る。

戦後は食糧難とか色々な事情で三年が過ぎ、昭和二十四年四月一日に上阪し企業に勤務する。

五十才位までは大病はなく送日致しましたが、六十才位になると腰痛、消化器などの症状にて病院通いをしている、今日今頃です。

今思うこと

広島原爆投下の日、私(当時八歳)と弟は安佐郡伴村の小学校にいました。

一時間目の修身の時間の始め、ピカ! ドン!と。

皆机の下に入りました。後はよく憶えていませんが、それから学校の裏山に隠れました。皆雨に濡れ、何気なく家に帰りましたが、この雨が黒い雨だったのです。

家の天井は跳ね上り、前の障子は一番奥の間に飛ばされていました。

母と末の妹は赤痢で寝たまま、父は兵隊にいき、祖母は忙しそうにしていました。

爆風は市内から一山越えた伴の山々にまで焼け焦げた布切れや紙切れ、紙幣までも飛ばしました。

その日の太陽は赤黒いお月さまのようで、南天に高く止まっていて恐ろしかったです。

後日、あの黒い雨は放射能を含み、病む人々が多く出ました。

私も検査の結果、腰の骨の変形を知らされ、約二十年程前には心電図の異常を知らされ、山登りや駅の階段を駆け登りをとめられました。

四、五年前からは血圧が気になり、この前の検診で「しんどいようなら、薬を使えば楽になるから。」と言われました。

私の身体は強い方ではありませんが、皆さんに支えられ頂いた身体ですので食べ物を大切に思っています。又、漢方のチカラや自然の力を借りて、日々の仕事を続けています。

今も昔も人々は私利私欲に、又は国益の為、防衛の為と試行錯誤を繰り返してきました。

しかし、人はかけがえのない高貴な存在ですから、決して破滅の為の道具のように使ってはなりません。又、自らも破滅の引き金を引いたり押ししたりしないで、戦争にかえて平和を創り出したい。

この自然界に漲る恩恵の前に私達は低い心をもって、報いて生かしてもらいたいと思っています。

※胃癌 昭和四十八年(一ヶ月) 東長原病院入院

※脳出血 第一回目、平成元年(四ヶ月入院)

第二回目、平成八年(一ヶ月入院) (共に野崎徳州会病院)

※腸閉塞にて平成十年(三ヶ月入院)以上のような病気で現在まで後遺症の為治療しております。

長男(医師)は平成十二年、血小板不良性くも膜下出血にて四十三歳で死亡。

次男は現在西宮市にて健在。

十五歳 被爆時の思い出

昭和二十年八月八日、広島県福山市に於いて空襲の為家屋全焼。

同月十日、父が軍人で広島軍隊にいて生死不明でした。

搜索の為被爆地の中をあちこち捜してあるきました。

広島駅、向洋、海田市、宇品、基町の練兵場、横川等も捜し歩きましたが不明でした。

特に広島駅、海田市のプラットホームには、沢山の兵隊さんが担架で寝ている中（その光景は痛々しい思いをしました）を捜しましたが、見つかりませんでした。

その間、一日半何も食わずに横川からトラック（木炭車）の荷台に乗せてもらい、安芸太田町（旧加計町）で一泊し、母の実家がある（同町字月の子）お寺に着きました。

安否不明の父は、終戦後無事に生きて帰りました。

私も戦後、昭和二十三年より昭和三十一年まで広島市に在住致しておりました。

被爆について

自宅屋内

広島市東区矢賀新町三. 八キロメートル

幼児三才につき不明

幸い自宅にいて負傷せず

自宅内で窓の外が突然光り、まどが割れる。

黒い雨が降りだしたと母に聞く。

翌日、父が帰宅せず母に連れられ大手町を目指し段原付近まで行くが混乱のため

帰宅。数日は母に連れられ市内へ父を捜し、自宅で寝起き、配給で生活する。

怪我はなかったと思う。

その後、今日までの健康状態

・ジフテリア 七才

・風邪をよくひき中耳炎などよくなりました

・十年前位に十二指腸潰瘍 今は完治

・十五年前に変形性脊椎症

・五年前に変形性膝関節症

・高血圧は今も治療中

・五年前位に逆流性食道炎 今も治療中

・甲状腺は一年に一回検査入院

・十八年前に子宮筋腫 貧血で気付く 子宮と卵巣の一つを取る

・十年前に腕の脂肪が腫れてきて切る

ピカドン

母は思い出したくなかったのでしょう。

悲惨な体験を他人に事実を伝えないまま、胸に秘めたまま、昭和六十三年に七十二歳で亡くなりました。

昭和三十二年に原爆医療法が制定され、原爆者健康手帳が交付されました。

私は当時高校生だったので覚えています。役所の方が幾度も家に訪ねて原爆者健康手帳の入手を勧めて下さいました。が、母は拒否し続けてきました。

昭和五十三年に母が少なくとも手帳を申請しようと思うようになった時は、すでに二十一年が経過していました。(母の定年がきっかけだと思います。)

長い間(およそ三十三年間)差別と偏見に耐えて生きてきた祖母や母は核戦争の被害者であり、核の恐ろしさを身をもって体験した証人として、私は直後の模様を聞かされた話や記憶は断片的ながら覚えているものの最後の年齢だと思います。とても悔しい事ですが、どんなに頑張っても長生きしたいと思っても、あと十数年くらいでしょう。

残った私達は生き延びて語り続けなければと思います。

昭和二十年八月六日午前八時十五分、広島市に投下された原子爆弾は大爆発し、強烈な熱線と爆風は爆心地から半径 2 キロ以内にあった殆どの建物を破壊し、焼きつくし、沢山の放射能を撒き散らし、十四万人以上の人を殺しました。

たった一発の爆弾で一瞬にして廃墟と化し街が燃え、人が焼かれたこんな大きな被害が出たのは世界で初めての事でした。

その時私は四歳 8 ヶ月でした。

前日から爆音や空襲警報が発令されていたり、当日は警戒警報も間もなく解除となって、爆心地から南へ 2.5 キロの皆実町の自宅で母と弟(二歳)と三人で遅い朝食を摂っていました。

突然家の屋根の瓦が飛び、タンスが横倒しになり、窓ガラスが割れた事、暫くして祖母が向宇品の路上で閃光による火傷で衣類がボロボロに焼け焦げて帰ってきた光景ははっきりと覚えています。

そのあと防空頭巾を被り、隣組の人達と誘い合って共同防空壕に避難しました。夜になると再度攻撃され、広島は全滅するとのデマが飛び、このままでは危険だというので避難場所を被服廠へと変え、まんじりともせず翌朝を迎えました。

爆弾の落ちた約三十分後からは北西方面にかけ放射能を含んだ「黒い雨」が降り注いだそうです。

不幸中の幸いだったのは、前に記した通り家の中に居たことです。祖母は外で閃光を浴びた為、ずっと下痢、嘔吐、発熱、脱毛、鼻血、手足の痙攣、発作的な呼吸困難等に苦しんでいました。

火傷の箇所はただれでひどくなり、膿が出たりしましたが、日数を重ねるに従って自然に快復しました。ケロイドは残りました。

おばあちゃんっ子で、別部屋でいつも二人で寝ていました。

寝床に入ると毎晩背中をさすってあげていたのを思い出します。

そんな身体でありながらも、当時は食糧事情が悪く食べていくのが精一杯で、母と交代で汽車に乗って食糧の買い出しに行ったりしてくれました。

原爆病院や比治山の中腹にある ABCC(原爆傷害調査委員会)から何回かの検査の依頼で受診したりしていました。

奇跡的に徐々に快復したかのように見えたが、最終的には原爆研究の為に解剖させていただきたいとの申し出があり、ABCCへ献体したそうです。

昭和三十一年十一月、私が十六歳の時でした。

私は熱線を直接受けなかったため、負傷もせず、何とか後遺症も出ることなく元気に見えるように見えますが、それは表向きだけで病院通いばかりです。

あの時に死んでいてもおかしくなかったと思います。

私達は原爆のことを「ピカドン」と言っていました。

「ピカッ」と光り、暫く間をおいて強烈な炸裂音が「ドン」ときたことからだと思えます。七十年間、草木も生えないとか、被爆者と結婚すると奇形児が生まれるという悪い噂が言われた時代もありました。だから、母は被爆者だということを口外しませんでした。

今、もうどこにもかつての焼け野原の面影はありません。

私達のごく当たり前のこととして平和な生活を送っています。

それとは裏腹に、世界のあちこちでは「核」の時代がエスカレートしています。

核兵器は二十一世紀の今も存在し、世界を脅かしています。

オバマ大統領が就任した時、自ら「核兵器のない平和な世界を創る。」と宣言したことにとっても感動しました。

平和とは、世界中の人が笑って過ごせる世の中と考えています。

全く知らない世代の人達も、皆が真剣に考えなければならない時がきていると思います。

平成二十年十月末日 記述

【追伸】

映画「原爆の子」

一九四五年八月六日、原爆投下から当時幼稚園の先生が、生き残っていた教え子三人と、先生の家の使用人だった初老の内孫(〇歳)を六年経った時から始まる映画です。

筋向いの松田宅で、主演の乙羽信子さんとの対談や、映画に弟(一才前)が八時十五分の時のアップ映し、隣組のお母さん達は庭の外でヒソヒソ話をしているところ、私達は盆踊りの場面にエキストラとして出演しています。

撮影 十一才の時

封切 十二才の時

DVD 有ります。

私の大好きないと子

原爆が投下した時、私は六才でした。

母は友人を助けるために広島市内(八丁堀)をさまよひ、比治山橋から一步も行くことの出来ない火の海でした。母はそのまま帰ってきました(大河山城屋)。

私はそのころ(旭町)幼稚園に通っていました。

室内にいたのでほぼ無事でしたが、ガラスに顔をくっつけて外をみていたら白熱灯を一瞬につけたような光が。今思えばその時投下したと思います。

ガタガタと音がして、私は恐怖のあまり腰が抜けハダシのまま家に帰りました。

道五十センチメートル先はほこり、けむりで先は見えません。

家に帰ってみたら障子、フスマ、たたみは外にふつとんでいました。

庫の内のものまで外へ出ていました。現在のガス爆発と一緒にの状態です。

その日の内に市内で住んでいたいと子が、全身やけどで皮膚はたれさがり見られた姿でない。その上やけどの友人十人連れてきました。全員が全く同じ姿です。でも感心なことに一言も痛いと言わずに辛抱していたのです。

いと子の弟は校庭にいたので即死(比治山小学校)。誰がだれかわからない状態だった、とのことでした。

急に家族が増えたので何か栄養のあるものと言って、母のすぐ上のおじが軍隊だったので、山口(岩国)へ買い出しに行きました。そこへ消火団にあい即死。母は何度も兄の遺品を探しに行きましたが見つからず帰ってきました。本当に一日が長い日でした。

いと子はすっかりやけども治り私と一緒に遊べると喜びましたが、つかぬ間に髪の毛がすっかり抜け、ぱらぱらと音をたてて、いと子の顔が一辺に暗くなり、一週間位で水が飲みたい水が飲みたいと水を飲ませてもらえないでこの世を去りました。

友人もいつの間にかいなくなり、その人達もいと子と同じようにこの世を去っていることと思います。

一年位して私は夏に片足百個両足で二百個位のでんぼができ、病院へ行っても良い薬もなく祖母が医者代わりでした。

おじの事ですが、広島で八時十五分にゲイトルを巻き家を出ようとしたところでピカッと光にあわてて、家をでたらガレキの下敷きになり、助けて助けて一人二人と助けてもきりがなく、あっと思ってみたら目の前に火がきていたと言っています。あやまりあやまりその場を逃げたそうです。本当に戦場より怖い話です。

今でも世界の中で戦いをしています。
同じような思いをしていると思います。
女性子供一番力の弱い所に悲しみがおしよせてきます。
何のためにもならないのだから、その力をもっといい方向に向けてほしいです。
一日も早く全世界が平和な世の中になってほしい。
人間同士で戦うことはやめてほしい。
仲良く手を取り合って平和を同じ気持ちになり前へ進んでほしい。
女性、子供たちの犠牲者をださないでほしい。
平和がどれほど幸せな生活を過ごせるか。
一人一人の気持ちの問題と心がけだと思う。

原爆投下した後

原爆が投下した二、三日後、広島市内をうろついた時、それはひどいものでした。本当に投下直後は歩くこともできなかったと思います。

河は水を求めた人の死体でぼかぼかと何日も何日も浮いて不気味な感じでした。

私は白血病の恐怖を初めて知りました。

学校のクラスの人で運動神経の発達した人で、また勉強も良く出来た人が急にしんどいと云って早引きして帰り、二度と登校することがありません。

先生がある日〇〇さんは白血病で亡くなりましたと言われ、目の前が真っ白になり、現在では白血病といっても成す事が出来る医学も進んでいなく、どうすることも出来ず。

核兵器は一日も早くやめてほしい。

これ以上の被害者は出さないでほしい。

平和を願います。

斐爆者

忘れもしません。

被爆の日、仕事中は警戒警報でした。

其の為、仕事をしていました時、俄に警報で驚きました。

硝子が割れ、驚いて外に出ました。

机の上の物は皆とび散っていました。

私は「あんたは歩けるから」と言ってトラックに乗せられ、多くの負傷者と共に学校に連行され、負傷者の手伝いをしました。

仲々片付かぬまま夕方になり、田舎道を通って被服廠に帰りました。

道々に沢山の軍人さんが倒れて「水をください、水をください」と言われましたが、水はありませんでした。

そして私は毎日自分も負傷しながらも負傷者のため、一生懸命看病しました。

中学生位の若い人が、おかゆを食べながら私の手を取り

「お母ちゃん、お母ちゃん」

と言って亡くなった人もいます。

戦争のために可哀想にたまりませんでした。

一緒にご飯を食べ、寝泊りした仲ですもの。

今でも思い出しております。

長崎編

(タイトルなし)

- (1)被爆せし人 人顔や手の皮膚が
垂れ下がるのも知らず逃げくる
昭和 20 年 8 月 9 日 午後 2 時 30 分頃
- (2)身は焼くも児を胸深くよろめきつ
原爆より逃れ坂登りくる
8 月 9 日 子供は 3 才ぐらいだった
- (3)水水を水を下さい 被爆せし
人は末期の水としらずに
8 月 9 日 午後 4 時頃
- (4)水をもとめ川は骸の人の群
原爆だとはまだ知らぬ朝
8 月 10 日 午前 10 時
- (5)原爆の熱線で児は黒焦げて
綱を片手に鉄路の土手に
8 月 10 日 6, 7才の男の児らしかった
- (6)動けない被爆の人人救護所で
まだ生命あるに蛆湧きており
8 月 12 日 満足な医薬品がないため
- (7)蛆うじが蛆が痛いよ被爆せし
人苦しみてつぎつぎと逝く
8 月 12 日
- (8)ひぶくれし人も牛馬も重なりて
被爆の街の橋脚うめる
8 月 13日 前夜よりの大雨により川が増水

被爆当時を記憶のままに

昭和二十年八月九日午前十一時二分、長崎に原爆が投下され、私も被爆者の一人として、あの悲惨な生地獄絵が、今も脳裏に焼き付いて、忘れることができません。

当時、私は、郷里・五島列島の役場に勤めておったんですけれど、五島の外の街に出たくて、長崎における叔父に世話していただき、弁護士の芦塚事務所に勤めておりました。事務所は、豊後町にあり、長崎県庁のすぐそばで、港にも近く、爆心地から三kmほど離れた所でした。

その頃には、戦争も激しくなり、長崎上空を敵機の通過する日が多くなり始めていました。「八月八日は、長崎一帯が灰の町になる」という情報に、毎日空襲におびえていた市民は、七日夜から指定の防空壕に避難し始めました。だが、防空壕の周辺は軍部が網を張り、「老人と子ども以外の人は一になるまで戦え」との命令で、みんな、家に帰されてしまいました。当時、ほとんどの男性は赤紙一枚の召集令状で戦争に行ってしまう、残された老人と女性は、防空訓練や竹槍の訓練を、毎日させられておりました。そして夜は、床下の防空壕の中で、銃声の轟音におびえながらの生活でした。八月八日も、みんな、緊張して警戒に当たっておりましたが、夜になっても銃声が一度も聞こえず、一日が過ぎてしまい、情報はデマだったのかと、みんな、安堵の胸を撫でおろして、九日の朝を迎えました。

運命の日

雲一つない青空に、昨日の緊張もいづらか安らいでいる矢先でした。いきなり「敵機襲来」の半鐘とサイレンが鳴り響き、静かだった朝が一変してしまいました。外に飛び出してみると、雲一つない上空を、B29の敵機が翼をキラキラさせながら、悠々と飛んでいました。間もなく、空襲警報が発令されたので壕に避難しました。「きょうこそ灰の町になるのでは」と恐怖におののきながらも、誰一人として声も出せず、無言のまま情報に耳を傾けておりました。サイレンと半鐘はずっと鳴り続けていましたが、しばらくして、警報が解除になりましたので、手を取り合って喜びました。警報解除のときは、みんな仕事をするように命じられていたので、私も、歩いて十分ほどのところにある郵便局に用事があり、十時半ごろ事務所を出ました。局での用事が終わって帰る途中、ピカッと、異様な光が空を走ったので、一瞬、「焼夷弾」と思って、近くの家に入れてもらおうとガラス戸に手をかけた時、「ドカーン」という強烈な音と共に、家が倒れてきて、みるみるうちに一面が真っ暗

闇になってしまい、何も見えなくなっていました。

私は、あまり突然のことに何が起こったのかと、ただ呆然として立ちすくんでしまいました。晴天で太陽が照り続けていたのに、何がどうなっているのかもわかりませんでした。暗闇の中で、家族の名を呼び合う声が方々から聞こえて、騒がしくなってきました。しばらくして、少しずつ視界が見えるようになったころ、警防団の人が「早く避難するように」と叫んで来たので、私も事務所に帰りかけましたが、建物が道路に倒れていて通れる状態ではありませんでした。しかし、何一つ持たずに事務所を出て来ておりました私は、人の後について走っておりましたら、「あなたは救護所に行きなさい。早く行きなさい」と警防団の人にきつく言われましたので、気がついてみると、白のブラウスが血で真っ赤になっていました。どこを怪我しているのか見る間もなく、只、無我夢中で救護所に行ってみると、爆風や、今思えば、放射能で大怪我をしている人が後から後からと運ばれて来て、仮の救護所はごった返しの有様でした。私は、治療していただくよりも早く安全な所に逃げたくて、そこからまた夢中で指定の防空壕まで走りました。私の指定されている防空壕は、御諏訪神社の横にありました。

壕に着いた途端に、急に気分が悪くなり、吐き気がして、もどしました。外で被爆し、走り回っていたので、悪いものを吸い込んだらしく、だいぶん後になってから、「その時にもどしたのがよかったのだ」と、お医者さんに聞かされてびっくりしました。その当時の履物といったら靴と下駄だけだったので、警報が解除になったその時、私は下駄履きで外に出ていました。壕でもどしたとき、足の裏が痛いのに気がつきまして、見てみると、爆風で飛んできたクギが下駄の底から表まで突き刺さっていて、足の踵からも血がたくさん出ていました。ブラウスにも血がべったりとついていたのは、飛んで来たガラスで顎を切っていたのです。

夕方ごろから、数ヶ所で火災が起こり、たちまち周りは火の海となり、夜空は真っ赤に、不気味に照らされておりました。待機していた消防車も爆風で潰されて使用できず、また、消火に当たる人もいませんでした。火は容赦なく燃え広がり、翌朝には一面が焼け野原になっていました。

みんな、自分の家の焼け跡を見に帰りましたので、私も一緒に行きました。

下宿も事務所も、ほとんど焼け落ちてしまっていて、町一面が本当に灰の町になっていました。焼け残ったコンクリートの塀には、無事で避難していることが、知人にわかるように、名前がぎっしりと書かれておりました。空いている所がありましたので、私も書くことが出来ました。いつも地下の防空壕に入れていた荷物は全部蒸し焼きになっていて、使用できるものは一つとしてありませんでした。当時、私は、五島列島から一人で来崎していましたので、焼けて住む所もなくなって、帰る家もありませんでした。そのころ、海には機雷がたくさん沈んでいて、客船の航海は全

面ストップのままになっていました。それで、町内のみなさんと一緒に、私も、壕の中で生活するようになり、夜は土の上に板を置いて横になるだけでした。防空壕は、横穴式で、いくつもあり、水もしたたり落ちていました。壕の周囲が公園になっていたの、何時の間にか、爆心地の方から大勢の火傷した人が運ばれて来て、足の踏み場もないくらいに寝かされていました。ほとんどの人が、身体全体が焼けただれており、その傷の上に赤と白の薬をつけているだけで、男女の区別さえつかないほど変形しておりました。そんな重傷の人を寝かしてあげる家もなく、夜もそのまま外に寝かされていました。意識のある人は、かすかな声で「水を、水を」とうめいていましたが、一人、また一人と息を引き取り、夜明けごろには、その声も聞こえなくなっていました。身元のわからない人は、そのまま公園の空き地で火葬され、その煙が壕の中まで流れこんで来て、毎晩眠れませんでした。一番辛かったのはおトイレに行くことでした。歩いたら「水を、水を」と足をつかまれそうに感じて、一晩中辛抱しておった日もありました。

空腹を感じた頃、田舎の方からおにぎりが届きましたが、真夏の暑さで悪くなっていて、がっかりしました。長崎市外の遠くから、背負って、歩いて、持ってきてくださったのですが、腐って食べられませんでした。壕の中のみなさんは、鍋や釜で炊きなおしをして、おじやにして食べる方もありました。私は道具がありませんでしたから、できません。それでも、不思議と、ひもじい思いはしませんでした。軍部から乾パンが届いたのは、だいぶんしてからのことでした。

被爆四日後の街は・・・

被爆から四日目に、着替えもなかったの、長崎駅から三つ目の駅の長与という所まで、預けていた衣類を取りに行きました。大怪我をしている人以外は汽車に乗せてくれないので、知人と二人で歩いて行くことにしました。

爆心地近くに入ると、一面が焼け野原で歩ける道路もなく、まだ整理できずにいる黒焦げになった死体が、山積みになっている有様でした。爆心地で見る原爆の凄さ、怖さは想像以上のもので、どのような言葉でも表現することができません。まだ見つからない肉親の名前を泣きながら呼んでいる姿は、精神的にどうにかなってしまっただけでしょう、もう気が狂っているようでした。誰の顔かも、形もわからない、変形してしまっている、一人ひとりの顔を撫でて歩くんです。真夏のことで、悪臭もひどく、死体には、ウジムシもたくさんわいていました。また、大きくお腹を膨らませた馬が何頭も死んで横たわっているのです。ショックで頭がおかしくなったのか、あるお婆さんは、肉の切れ端を懐に入れて、サイレンが鳴るたびに「お腹が空いた」と言って、口元を血で真っ赤にしながらほうばっていました。動物の肉か何かはわかりませんが、生のままで、血のべったりとついたのを食べているんです。

当時は、周りがみんなそうでしたから、何も感じませんでした。後で考えてみると、まさに「地獄絵」そのものの光景でした。

悪臭と暑さで二人とも気分が悪くなったので、線路を歩くことにしました。まだ終戦になっていなかったのも、敵機が低空で飛んで来ます。そのたびに、私たちもここで死ぬのではないかと怖くなり、畑の中に何回も隠れました。

「筋無力症」に罹る

数日後、五島に船が出ることを聞き、早速に手続きをして、帰ることが出来ました。普通なら、五島列島の福江市まで四時間位で行けるのですが、終戦の翌日、十六日の正午に出て、翌日の夜明けの三時頃に着きました。電話も通信もストップしてましたから、家族に無事であることを知らせることも出来ずに、突然に帰りましたので、親兄弟が「夢のようだ」と泣いて大喜びしてくれました。叔母なんかは「もう、亡くなった」と思って、毎日、仏壇にお参りして、お経をあげていたそうです。しかし、一緒に船で帰った幼な友達の姉妹は、全然傷もなかったのに、数ヶ月後に高熱を発し、髪の毛も抜けてしまって、二人とも亡くなりました。寝ているというので、行ったんですけど、会わせてもらえませんでした。爆心地の近くにおったんですね。大きなショックを受けました。

ほかにも、被爆しながらも元気で帰ってきた人が、同じような症状で何人も亡くなりましたので、家族の者が、私の体を心配して、何回も病院に行って診察を受けさせました。原爆が落とされたときは、何もなかったんですけど、二十才を過ぎてから、力がなくなったりする「筋無力症」というのに罹りました。医学がまだそんなに進んでいなかったのも、薬もありませんでした。その他、いろんな病気が出ましたが、お医者さんには「原爆との関係によるかどうかわからない」といわれました。最近、「アレルギー」になっています。「喉アレルギー」で、すぐせきが出ますので、いつも飴なんか持って歩いているんです。

全世界に核兵器廃絶の声を

被爆者は、他の人よりも老化するのが早いと聞かされておりましたので、この年まで長生きできるとは夢にも思っておりましたが、現在も、月二回の診察を受けながら、東友会(被爆者の会)の一員として頑張っておられます。

広島・長崎で被爆された方々ばかりでなく、日本全国至る所で空襲に遭い、また、戦地から九死に一生を得て帰られた方々も、大勢おられると思います。そして、年々高齢化し、今も、その後遺症に苦しみながら、生きておられる方が多いと思います。

戦争を知らない人々には、その苦しみ、悲しみ、怖さがわからないかもしれません。よく「神戸大震災と似ている」と云われますが、原爆は、もっともっとひどいものでした。

今こそ、全世界に戦争反対と核兵器の廃絶を訴えるべく、決意していただきたい。そして「戦争を二度と繰り返してはならない」と、声を大にして叫び、世界中が平和であることを願いたしまして、私の体験発表とさせていただきます。

一九九九年五月二八日(金)の講演をまとめました。

(タイトルなし)

あの悲惨な瞬間、原爆が投下された八月九日午前十時四十分、夜勤明け帰寮中だった。

空襲警報後、落雷のような音と同時に光線と熱線と爆風が。何が起きたかわからず身に付けた服は焼けてぼろぼろ。身体は火傷あたりの風景も無残な姿に。

怪我や傷を負った人達は助けを求めて走り廻って喚く人、すでに倒れて死んでいる人、誠に地獄の世界をみるようである。

太い街路樹は折れて田んぼの稲は水面まで焼けている。一緒に居た友達もどこへ行ったか解らない。

一時間ぐらいで寮に帰つくと、寮は倒壊。

屋敷の庭が広く、芝生が植えてあったので丁度休む場所があり、助かりましたが、この場所に助けを求めて集まりだしたのです。これをみてか、米軍機が焼夷弾を一晩中ビラを巻き散らして、近日中に日本の国を灰にすると書いた「ビラ」である。

案外私の怪我は軽かったので担架を四人で持って付近の怪我人を道の駅まで運び諫早の陸海軍病院へ助かる人を送りました。駅待ちで死んだ人は駅の広場で火葬しました。

救援一日目に私を尋ねる怪我人はよく見ると橘女学校の二年生で同じ会社の同僚のお姉さんでした。

八月十日の早朝でした。着物はボロボロで髪は焼け身体は火傷で誠に無残な姿である。本当に痛々しくて可哀想でなりませんでした。僕の服と着替えてもらったが、傷の手当はどうにもならず。ただ啞然見過ごすばかり。ずっと僕の顔を見てよかったねと何度も言いながら苦しみを絶えながら短い一生を僅か十六才で逝く哀れさ。心からご冥福をお祈りします。

そして救援も終わり寮長に被爆者証明書をもって一日でも早く田舎へ帰りたくて汽車が運悪く所々空爆で破壊されて思うように走行できず。康が島まで約十日かかり、食事も水とカンパン。人様の恵でなんとか帰りつきました。

戦争は悲劇を生むだけ。

世界は平和が続くことを祈願します。

被爆当時の状況と家族状況

父と母 自分の三人家族でした。

父親は兵役を終わり、鹿児島から長崎の三菱造船所で働いていた。

長崎市三和町(旧土井ノ首)に借家住まいでした。

家主は京崎様で現在手帳を受けています。

当時は毎日防空壕を掘っていたと聞いています。

(両親の話として)

八月九日に出かける予定が、隣村の人が病気になって代わりに父親が一日早く出かけた為に九日に長崎の街を通らずに難を免れたようです。友達の父親は九日に出かけて原爆にあって亡くなりました。

私は昭和十九年九月二十四日生まれで生後十か月半でした。

母の話では、当時は空襲警報がなり、防空壕に入った途端 B29 が防空壕の前を通り過ぎたと言う。それからしばらくして、原爆の爆発と光と爆風が耳を劈くように通過したと聞きます。

それから、山の方で農作業をしていた人は爆発の光でやけどをするぐらい熱かったとも聞いています。

家に帰ったら爆風でススだらけで後片付けに皆さん大変苦労したと言う。

(遅延理由)

原爆の落ちた場所から遠いと思っていたので、両親も遅くなりました。両親が元気な内に自分の生まれた所に三人で行きました。

それで初めて原爆手帳がもらえる事がわかって両親の申請を致しました。

当時の友人や近隣の方は全部手帳を受けており、皆さんに勧められた理由もあります。

お陰さまで両親は大変助かりました。父親は十三年前に他界しています。

自分はその時会社を経営していたので、忙しいのと体調は悪くなかったので遠慮致しました。

最近 六十を過ぎてから体調が気になり三か月に一回検査を受けております。

家内は原爆は関係ありませんが、昨年喉頭がんで治療を受けております。

このような状況で自分までが体調を疑うようになり手帳の申請をお願いした理由です。

(タイトルなし)

戦後体験者として伝えなければとは思いますが、断片的にしか記憶がありません。昭和二十年に小学校に入学しましたが、空襲警報のサイレンが鳴ると慌てて家に帰り、町内で掘った防空壕へ入ります。

夜は口ウソクをつけても灯りが外へもれない様窓には黒い布を張っておりました。原爆投下の時は警報もなかったし、母に用事を云われ隣の家に行きましたが留守で玄関先に立っている時に赤い光線が山に沿って走るのを見ました。

戦後の食事は海に浮いた魚を食べた、ということも聞いたことがあります。

女・子供は早く逃げなければということで、両親の実家の佐賀県に疎開しましたが、帰ってからが大変でした。

食べるものがなく、芋のつるは良い方でカボチャのつるも食べて、とにかく食べられるものは何でもという感じでした。

買い出しに行って衣類等と米を交換してもらいましたが、列車の中で警察に見付かると没収されてしまいました。

被爆の日

当時はまだ二才という幼いころで、自分自身に全く記憶がありません。私の八才上の姉に聞きました。

当時、姉は家が農業で忙しい農繁期で学校を休んで食事の支度をしてから外へ遊びに友達と行った所、ちょっと遠い所できらきらと長い帯じょうの光がでたと思ったら、強い、黒い爆風で逃げて帰ったとのことです。

私は二才上の兄と家のすぐ外で遊んでいて、父親が二人を両方に抱えて、防空壕へ避難したと聞いています。

六十五年経た薄れゆく記憶を辿り

昭和二十年八月九日、午前十一時二分。

一発の新型爆弾（原子爆弾）が炸裂した。

この日の長崎は雲の多い蒸し暑い日で、早朝より何回かの空襲警報が発令され、登校できず自宅にいました。警報が解除されたので登校しようと玄関を出てすぐ落下傘が浮いていると近所の人々の声を聞き、屋内へ戻り身を伏せた。その瞬間、強烈な閃光、強烈な爆風に数メートル飛ばされ、たたきつけられた。

まもなく眩んだ目をこすって起き上り数秒後。爆風で吹き上げられた屋根瓦、トタン、木片、壁土等、いろいろな物が大雨のように降ってきた。自宅も柱だけが残っていましたので二階の北側に上がり市内を見たところ浦上方面が燃えてて、異様な雲が上昇しゆくのが見えた。

八月六日広島が落下傘に吊られた新型爆弾で全滅した事を前日学校（県立長崎工業）で聞いていた。

登下校は自宅より千馬町電停へ、チンチン電車に大橋終点まで乗車、山里国民学校の上となりにある学校への道順でした。（現在の南山高校）五月以降は学徒動員が続く毎日で、あの日は小学校からの友人が早朝より登校しており、安否が心配で私も学校へ。うすれゆく記憶を辿りながら歩いた道、市内の状態等を綴りました。

自宅から出たものの落下物等で歩くのが大変。

千馬町より電車の軌道に沿って進むにつれ被爆状態がだんだんとひどくなってゆき、長崎駅も燃えており、西部ガスのガスタンクは爆発したのか二か所ともペシャンコに、西坂町も火災が発生しており、浦上の方は真っ黒の煙でよく見えない。北から南へと避難してくる人々、ズボンを身に着けているがボロボロになって上は裸、上半身は火傷で紫色にはれあがり皮膚が裂け、ダラリとたれさがって黒くなったような人。

稲佐橋通り付近より火傷した避難者が群をなしていた。

ここより先は熱くて行けないといわれたが、井樋の口電停まで行くことにした。

銭座町も燃えており、歩く順路を変更、長崎駅前へ戻り、小川町電停、勝山国民学校の裏を通り、西山町へ、上長崎国民学校、県立長崎高等女学校を過ぎ、金比羅山へ登った。

高射砲陣地の兵舎が山頂南側下方にあり、屋根は全部吹き飛びメチャメチャに兵隊さんも被爆していた。真下に見た浦上の町は一面火の海。真夏の太陽に生き生

きと緑にはえていた木々、青草は茶褐色に焼かれみるかげもない。浦上方面より避難してくる人達、子供、老人、男女の識別さえわからない人達。その夜は山を下りることができず、避難途中の人達と一緒に野宿、疲労の為何もわからず熟睡した。

八月十日、さわやかな朝の風で目が覚め、一緒に野宿した人達の大半はそのまま帰らぬ人と。

眼下の浦上は見るかげもなく瓦礫の野となり、工場の鉄骨の残骸が無惨にみえた。山を下り、大学病院浦山の穴弘法奥の院付近から浜平町へ。

本尾川沿いに浦上天主堂を目指し、上野町の学校へと向かいました。犠牲になった人々、この惨状を目の前にして、これが生地獄かと。

学校も焼け、真っ黒に炭化した生徒、火傷で赤く水膨れした生徒、ウジ虫にむしばまれて骨がみえていた生徒、探しても探しても見つけることができなかつた友人。その日から一度に数人を火葬、冥福を祈り合掌。

十四日昼まで同じ作業を繰り返した。

長崎市内のあらゆる所が火葬場となり異様な雰囲気でした。

私の体調も悪くなり、一度帰宅して入院することに。

大橋より松山町、浜口町、岩川町、浦上駅前、井樋の口電停、自宅へと衣類を取りに帰ったが防空壕内に保管していた衣類、食料等すべてがなくなっていた。帰途にみた光景は瓦礫と化した浦上の街、鉄骨だけの工場、大橋車庫には数台の電車が台車だけのこして木製部分は焼失。

浦上川をみると水を飲みにゆき、そのまま亡くなった人が両岸にずらりと並んでいた。黒く炭化した数知れない人々、リヤカーを引き、立ったままの状態で亡くなっていた人、浦上駅前には数台の馬車が即死した馬もろとも倒れ、すぐそばには半焼けになった猫がまだ生きていた。

十五日早朝より道の尾駅へ、大村の海軍病院に送られましたが、被爆患者が多く診察も順番で、まず無理か。

佐賀県の嬉野海軍病院へ移され九月下旬まで病院と母親の知人宅とで養生しましたが、下痢がひどく九月末に長崎へ戻りました。下痢が普通になるまで約六か月、体の快復は年単位の期間が必要で、いまだ継続。

被爆後六十五年を経ても被爆者は絶えず
こころとからだの苦しみにさいなまれている。

私の 8 月 9 日

1945 年 8 月 9 日、午前十一時頃、当時小学 1 年生でした。

夏休みで友達と泳ぎに行く途中でした。

その時、ピカッ、ドンと光と大きな雲が空いっぱい目に映りました。

途中の家も、窓ガラスが割れ、家具もやられてびっくりして路地に逃げ、時間はわかりませんが、1 分ぐらいかなと思っています。駅の方が赤く燃えていました。

小生達は怖いので家に戻りますと家も家具も散らかりそれを片付けるのに必死でした。あまり覚えていませんが、後からあの爆弾は原爆だと聞かされました。

近所の人達も被爆にあい、病院もいっぱいなので家に連れて来て治療していました。皮膚が禿げ肉が見えて、夏なので傷にウジ虫が沢山わき、それを取るのに「イタイ、イタイ」と意識もわからないのに叫び可哀想でした。体験と言っても小学 1 年生だったので怖くて、うろうろして、あまり覚えていません。

大戦の追憶

七月中旬頃より戦が激しくなりましたが、父は休暇、兄は夏休みだったので三人でギッコン船で魚釣りの帰り、B29が上空より射撃してきて、もうあめ玉の様なものが海水にたたきつけ父が「お前達は舟底に逃げろ!」と言い、本人はうつ伏せになり一瞬臚を止め西洋タオルを被りましたが、はずし静止したらやみました。

又戻ってきてばらまき、雨霰です。

低空飛行の連帯は人を馬鹿にした様に去って行きました。

その時九死に一生を得たと思いました。

その頃より空襲が激しくなり、昼も夜も警報が発命され、防空壕がよかったです。

さて、本番はこれからです。

私が四歳の時の暑い夏の日だった。

家の前の毛井首の浜で、兄や近所の子供達男女五、六人で泳いでいました。

午前十一時頃、空が、町が急に朧月夜のようにになりました。

その日は朝からよく晴れ、お昼前だったので小さいながらはっきり覚えております。

最初は雨でも降るのかなと思いました。

大人達が騒ぎ、右へ左へ小走り行き来したのを思い出します。

伯母は浦上に住んでいましたが、一家全滅、家も家族も何もありません。

父は兵器工場で働いておりましたが、毎日毎日姉の便りを捜して放射能を被り、四十代で肺が痛いと言い出し、家も荒れ出しました。

小学校に入学したら、先生の片耳が爆風で根元から飛ばされ、首はケロイドでやられていました。その先生も随分前に亡くなりました。

身体だけが調子悪いのではなく、精神面も破壊されて嫌な過去を思い出したくないけれど、一筆の依頼を受けましたのでペンを取りました。

今は平和で、オリンピック、ゴルフ、野球、スケート、世界陸上、水泳などで若人が好記録を出しているのを見ると、羨ましくさぞ爽快なことだろうと思っております。

母に聞いた話

長崎市磯道町。爆心地から八・五キロメートル離れた所で被爆しました。

一歳十カ月の時です。

だから全然覚えていません。

しかし、今でも私の前額部に痕跡が残っています。

自分の手で前額部を触ると、骨が少しへこんでいます。

その時は自宅前の道路にいたらしいです。(いつも空襲警報が鳴ると、家の裏庭にある防空壕へ近所の人達も逃げ込んでくる毎日だったそうです)

でも、いつもと違う異様さを感じ、急いで防空壕へ逃げている時にリンゴ箱の角にどこかをぶっつけたらしいです。私が大声で泣くものだから「見つかってしまう!」と皆から嫌われていたそうです。

爆風で家は破壊する事はなかった様です。

その晩、帰ってこなかった父の兄と弟、母の弟を捜しに、祖父と母は次の日から毎日爆心地付近はもちろん、市内の至る所を歩きまわりましたが、見付ける事が出来なかったそうです。

それはもう地獄絵で、死体の山。

水を求めて川へ這いずり、力尽きて水の中に落ちて幾重にも折り重なって死んでいったそうです。

だから多くを語ろうとしません。

今でも思い出すのが苦痛の様です。

最近、日本国の周囲でも危ない空気が漂ってきています。

戦争だけは絶対反対です。

地球上から早く戦争はなくし、人々が安心して生活出来るよう知恵を出して考え、行動しなければなりません。

近況

年々腰痛や膝関節痛が増えて、近所のスーパーへ買い物に行くのも一時間以上かかり、帰宅する間に時々休んだりするようになってしまいました。

三ヶ月前から気管支炎にて通院しております。

何とかこの状態で残りの人生を過ごせたら幸いと思っております。

被爆者

昭和二十年五月佐世保海兵団より長崎三菱兵作所大橋工場に派遣隊として配属され、同工場付属寮に寄宿していました。

八月九日平素と同じく同工場で魚雷の製作作業中、朝から警戒空襲警報とその解除の繰り返し発令され、落ち着かないまま作業していましたら、午前十一時過ぎ、工場の南側窓ガラスが一瞬青白い閃光を見たらあとは何も解らなくなって、気が付いたら背の上に何か落ちて来たので、気が付いたら同工場内が暗く煙が立ち込んでいた。顔中血だらけ、何も解らず外に出ると多数の人が倒れていた。工場内は危ないので近くの林に大勢の人がいたので一緒に汽車が着くのを待つて居たら佐世保の方から列車が来たので乗車して大村海軍病院に行き、入院して治療して、後、海兵団に帰り、後、八月末鹿児島に帰った。

被爆時の状態について

場 所 工場内にて周囲はガラス窓
爆心地 一・四キロメートル

青色、白色の光線を見ました。

被爆してから二週間ぐらいしてから発熱して食欲がなくなり、頭の脱毛が多くなり、口内の出血、歯茎の出血等が多く、約二か月近く入院しました。

被爆体験(姉兄に聞く)

長崎市銭座町で平穏に暮らしていた家族。原爆投下当日、父は三菱造船所内で、長姉は市役所内で、長兄次姉次兄三人は自宅屋内で、母に抱かれた私は屋外玄関口にて被爆しました。

「兄ちゃんがおらん」と言っていたら間もなくして頭から血を流しながら倒壊した家から長兄は這い出してきたそうです。

とりあえず近く山手の防空壕へ。途中兄たちの遊び仲間の男の子が体中血だらけで「助けて」と言っていたそうですが…

父は会社から帰る道で長姉を捜しあて、やっとの思いで尋ね尋ねて防空壕へ到着。そのあと母は祖母のいる所へ炊き出しに出かけたそうです。

まもなく私達一家は倒壊した家の床下から(地下に保管していたらしい)衣類等を引っ張り出して佐賀の伯父のいる所へ。駅へ向かう途中、幸いにも知り合いの人が運転する死体を運ぶ空のトラックに乗せてもらったそうです。

母は八月末頃から原爆病を発病し、佐賀の国立病院に入院。気丈にも「子供五人も残して死ぬるもんね」と言っていた母は、どんどんひどくなり、翌月の三十日に死にました。三十三才という若さです。

「勝っちゃん」と手を差し伸ばしたそうですが、あまりにも変わり果てた顔面頭部に恐がって、私は父にしがみついたそうです。

思い出したくないのか、父はとうとう死ぬまで原爆のことは話しませんでした。また、私達は被爆したことをずっと世間には内緒にしていました。

二才になる前の私は勿論当時の事を知りませんので、数年前から姉や兄達に状況を聞くことができました。

「お母さんの顔も知らないで」ということもあってか姉兄達は私をよく可愛いがってくれました。今でも感謝して居ります。

宿命＝被爆者

生まれて二歳の八月九日、父の実家長与町丸田にて母と二人で昼食の準備中、悪魔は天空より降り注いできた。

母に抱かれ防空壕の中、ふと気付けば二人は真っ赤な鮮血に染まっていた。逃げ出す時、家の天窓からガラスが降り注いだからだ・・・。

母親はナースの資格を持っていたので、村の医者から常に呼び出しを受け、昼夜連れ回されていた。

父は三菱長崎造船所に勤めていて、休日には百姓で過ごしていた。

幼い頃より僕も田畑に出て手伝ったのである。

「ピカドン」が落ちて二日後の八月十一日、長与から母に手を引かれ道之尾から浜口町、そして山里の我が家の確認と父の消息を訪ねて歩いた。

我が身に残留放射能を全身に浴びていた。

今後に最悪な事態が訪れる事など知る由もなかった。

小学校に入っても背は伸びず一番前。か弱く病弱だった為、学校より病院に通う日が多かった。

中学に入る頃、あらゆる体の回復に努め、中でも走る喜びを知った。校内マラソン競技にて校内トップの成績をあげ、NHK 放送陸上にも参加し、九州地区上位の成績も残せた。

いつ大病で倒れるか知れない幼少期を過ごし、青年期に向かいやっと思える希望が湧き出した矢先、原爆病(白血病)の恐ろしさをいやが上にも知る事となった。中学に入り仲良くしていた友達が急に亡くなった・・・白血病である。でも、彼も自分と同じ被爆者とは知らなかった。

当時「被爆した事」は一切口を閉ざしていたからだ。成人迄に必ず、白血病になり死ぬと言われて信じていた。被爆した事を話すと、彼女も出来ないし仲間外れにされていたからだ・・・。

次は自分の番。不安この上なく、昼夜に渡り襲ってきた。

時は流れ・・・

体力も少しずつ回復し、将来に希望の光が射してきたのも束の間、天国から地獄に突き落とされ、生きる希望が絶たれた思いで落ち込んでしまった。学校に行く気も起きず、一人田畑へ夜遅く迄百姓で働き過ごした。

日は薬、なんとか中学を卒業、全日制の高校へ汽車を四十分乗り継いで通う。いきなり柔道部に籍を置く。がむしゃらに自らを鍛え直す為であった。その頃の気持ちとしては、白血病が起これば起れ腹は決まっていた。

そんな時、母が倒れた。難病で、医者も原因が掴めず三年間寝たきりだったが、なんとか生還した。

自らも病弱な幼少期、多感な少年期、常に自らの宿命『被爆者』を忘れる時はなかった。急に体調を崩した時など、もしやあの病ではと心安まる時はなかった。数々の苦しみの中で、人生一度、生きる希望をなくしては此の世に生まれた意味がないと決意する。

昼間は百姓と果物店で配達のアルバイト、夜は定時制の高校に転校編入学し、四年間通い卒業した。

子供の頃から機械弄りが大好きだったので設計士を夢に描き、一九歳の夏、八月三十一日、東京行き急行に乗った。向かう先は東京のはずだったが、降り立ったのは大阪駅。朝六時二十分、ホームの売店で新聞を買う。今晚の寝宿と明日からの働き口を探すため……。

二十歳の成人式の朝は新聞配達をしていた。仲間が遊び寝ている時も、一人黙々と勉強して、数々の資格を取得した。目的である機械設計士として日々技術を磨き、役職も上っていった。しかし、いついかなる時も被爆の呪縛からは逃げ出せなかった。

三十二歳の時、大東市を『原水爆禁止宣言都市』として市議会に上程し、可決して頂いた。

また、『大東市原爆被害者の会』も設立した。

これからも使命を果たすべく、我が為人の為、世界の人々が平和な毎日を送れるよう希望をもって、微力ではありますが又一步前進して参ります。

(タイトルなし)

昭和二十年八月九日夏休み中のこと。

私はまだ五才位ですので、夏休みという事は別に関係はないんですが、お盆の前
の日です。

私の前がちょうど提灯屋さんで、忙しくしていました。なのでお兄さん達は提灯屋
さんのお手伝いで提灯の紋に黒スミで塗ったりしていたそうです。

その時に光線が走りドンと爆発して家のガラス障子が倒れ、ガラスは割れて、本当
に恐ろしくなり家の中に入り、家族でしばらくじーっとしていました。

この時私は家の前で近所の友達四～五人位で遊んでいたんです。そしてその後、
時間が経った後に少しはなれていたんですが、防空ごうに避難しました。

夕方になり家の方へみんなと一緒に帰りました。

この日のことは、小さいながらもすごく記憶はしております。

子供だったので、体の調子のこと(病気等)何を食べていたかもは覚えていないん
です。でも、こわい事はよく記憶しています。

このような悲惨な事は絶対にあってはならないと思います。

長崎の記憶

1941年(昭和16年)12月8日。ハワイ真珠湾攻撃から大太平洋戦争が始まりました。当時私はまだ1歳勿論なんの記憶も残っていません。朧ろながら記憶に残るようになったのは、1945年(昭和20年)終戦の年になってからです。

家を出る時はいつも防空頭巾を被されていました。

3月の大阪大空襲 B29 爆撃機による焼夷弾の無差別投下。死者4千人、被災者50万人以上を出す空前の被害となりました。

そして6月にも大空襲がありました。心配した母の実家である長崎から大阪は危い、長崎に來い。そして長崎へ疎開6月末頃だったと思う。

8月9日当日はいとこと部屋で遊んでいました、その時ピカッ閃光が(稲光のような)暫くしてすごい爆風(熱風)がそして障子や襖が吹き飛ばされて來ました。

わたしも、いとも吹き飛ばされ何が起きたのかパニック状態に。天井板が落ちて来て身動も出来ずもがいていた所に父が助けに來ました。抱えられて裏庭の防空壕へ、途中土壁がくずれてすごい土煙ですごく息苦しかったのを覚えています。よく遊んでいた裏山の茅葺屋根の大きな家がすごい炎で燃えているのが見えました。近所に10数軒あった茅葺屋根の家は全部燃てしまったそうです。

防空壕から外へはなかなか出して貰えません。3日程して母のすきを見て外へれました。

目にしたのは大勢の人達が遺体を焼いている光景でした。その時は原爆による犠牲者だとは知りませんでした。

親はこの光景を子供には見せたくなかったのでしょうか。子供は邪魔だからとすぐに防空壕へ連れ戻されました。別に恐怖心とか気持が悪いとかそんな思はありませんでした。あれからもうすぐ66年になります。

わたしの被爆体験

原爆投下の日、わたしは従兄弟たちと座敷でトランプ遊びをしていました。ある時、目もくらむ様な閃光とともに爆風が吹きすさび、私の生家は山の中腹にありましたが、庭先に立っていた直径二十センチ程の柿の木が爆風の為にまっぴたつに折れてしまいました。

家の入口にあった大きめの下駄箱は裏口まで吹き飛びました。藁葺き屋根の天井からは黒いすすが辺り一面に降り注ぎ、足の踏み場のない有様でした。

家から十分位の所に駅があり、小川から流れる川の中央の右側に墓地があり、その近くにモジ鉄道局の官舎が数十軒ほどあり、そこが被爆死体の置き場所になっており、そのすぐ上が死体の焼却場になっていました。

毎朝のようにトラックで何十、何百と数えきれない位の死体が運ばれてくるのを何日も見物に行ったものでした。

被爆中心地の松山のすぐそばを流れる浦上川に、熱さをさけようとして飛び込んで死体をなった人達の最期の姿だったのです。

それがあの放射能の所為だと判ったのは、随分と後のことです。

私の父は原爆投下の夜に出張先から戻ってきましたが、翌日からは中心地から 1 キロ程あるかなしかの工場へ休みなく勤め続けで働き、顔中を血だらけにして息絶えました。

昭和二十三年五月一日、父が此の世からあの世へと旅立った日です。

三十九歳でした。

市民が綴った戦争体験記(令和7年度版)

発行年月:令和8年3月

編集・発刊:大東市市民生活部人権室

大東市谷川1丁目1番1号

TEL:072-870-0441

印刷物番号

7-108
